

ウィズコロナ、ポストコロナの時代に向けて

学長室から

竹屋 元裕

新型コロナが徐々に落ち着いてきました。感染者数は高止まり状態ですが、重症者数は確実に減少し、世の中の流れも規制緩和に向かっていきます。ウィズコロナ、ポストコロナの時代の大学はどうあるべきなのか、私なりに考えてみました。

①対面授業の復活と一定数の遠隔授業の恒常化

対面授業を復活させるのは当然の流れですが、遠隔授業のメリットも分かってきました。コロナ禍でDXが加速し、オンライン環境の整備や学生・教職員のオンライン技術の習得が進んだことが背景にあります。私の病理学講義では「反転授業」を行っていますが、学生アンケートでは「遠隔授業で事前に予習することで、次の対面授業では、理解が一層深まった」というポジティブな意見が多くありました。本学では、多くの学生・教職員が登学をJRに依存していますが、遠隔授業は災害時にも効果的です。

②コミュニケーションチャンスの増大

キャンパスライフは「隠れたカリキュラム」と言われますが、学生諸君が大学に求めるものは知識の修得や資格取得だけではなく、授業以外の経験によって人間性を高めることにも大きな期待が寄せられています。クラブ活動・サークル活動の再開と活性化に加え、短期留学制度などの国際交流についてもオンサイトによる異文化体験を復活させたいと思います。

③コロナ禍で得られた経験を活かした新規プロジェクトの推進

前述の遠隔授業体制の整備はコロナ禍で得られたメリットの一つですが、PCR検査体制を構築できたことは本学の特色を活かしたユニークな取り組みと言えます。PCR検査は学内のみならず、大きな社会貢献ともなっており、PCR業務を中核とした衛生検査所の開設は本学の強みとなることが期待されます。

私達は新型コロナを体験して、多くの事を学びました。ウィズコロナ、ポストコロナ時代に向けた優れたアイデアがあれば是非、ご一報下さい。

◇

◇

私の趣味は男声合唱ですが、規制緩和を受けて所属する男声合唱団KGCも再始動です。

6月5日(日)11:40-12:00「オハイエ音楽祭(花畑ひろば)」で演奏します。ご来場をお待ちしています。
=写真は11年前の演奏風景



新任教員によるお披露目講演会と昇任教授による講演会が5月24日(火)=50周年記念館、27日(金)=3109講義室M=で開催されました。

24日は医学検査学科2人と看護学科4人、27日はリハ学科PT専攻5人の教員が壇上に立ち、10分の持ち時間で自身の研究内容等を披露しました。

このうち、医学検査学科の青木学教授

新任教員らが
お披露目講演

は「HIV-1はどのように薬剤から逃れるか」と題して薬剤耐性メカニズムについて講演しました。また、同学科の安楽健作教授は、「一期一会-その時のチャンスを活かす-」と題して学生時代から継続して本質をつかむ努力に力を入れ、恩師の先生方とともに携わってきた研究について語りました。

(安部悠介)

社会に向けて物申す！ 「アカデミックスキルⅢ」ポスター発表会

学生が、社会で起きるさまざまな事象に対する意見や提言を発信するポスター発表会が5月30日（月）、50周年記念館など3会場で行われました。2年次生を対象とした全学必修科目「アカデミックスキルⅢ」の一環です。学生たちはグループごとに選んだ「内密出産」「貧困」「ドーピング」「男女格差」などのテーマで意見発表を行い、質疑応答にも応じていました。

内密出産、貧困、ドーピング、男女格差... 64班 堂々と発信



ポスター発表する学生グループ
=50周年記念館

ポスターは4～5人編成のグループが与えられた新聞記事からテーマを探し、資料収集、整理、グループディスカッション等を経て、3～4週間かけて作成しました。当日は全64班が学科ごとに3会場に分かれて発表しました。司会進行は、前年度のアカデミックスキルⅠで受講生の中から募り、アカデミックスキル支援センターが養成したリーダー学生が務めました。

演壇に立った班の中には、事前に入念な練習を積んできた班も多く、聴衆に向かって原稿に頼ることなく、堂々と発表していました。また、会場からの質問にもよどみなく答えていました。

授業を担当する渡邊元生・熊本日日新聞編集専門委員は「発表態度はどの班も満点に近い。ポスター作成によって素材の整理もできているので、（最終課題である）ロジカル文作成へと導きたい」と話していました。（松尾健志郎）



学生との研究「緩やかな山登り」

リハビリテーション学科理学療法学専攻

土井 篤教授

図書館と学術研究部（P&P報告会含む）共催「サイエンスカフェ」が5月24日（火）、キャンパステラスで開催され、リハビリテーション学科 理学療法学専攻の土井篤教授が「学生と さるすべりにて二歩前進 時にズルリと 金峰登頂（基礎研究の論文紹介）と学内P&P研究報告」と題して、種々の疾患モデル動物に対する介入研究の成果を発表しました。13人が参加。

土井教授は、学生と研究を行う過程で、時には仮説通りにいかなかった実験や、実験が予想通りにいかなかったおかげで逆に面白い展開になった研究を具体的なデータを示しながら説明しました。また、研究を山登りに例え「学生と一緒に研究を行うには、無理の無い緩やかな傾斜の山登り（やさしい実験の組み合わせ研究）が良いかもしれません」と述べ、「たとえ、やさしい実験系であっても、考えた仮説を否定するようなデータに出くわした時には、それを信じて実験を進めていけば面白い研究や論文になるかもしれません」と続けました。

研究誌委員としての立場から、「もしお蔵入りしているデータがありましたら、ぜひ来年度以降、熊本保健科学大学研究誌への投稿をお願いします」との呼びかけも忘れませんでした。講演後は活発な議論が行われました。来月のサイエンスカフェは6月14日（火）に開催予定です。（安部悠介）



サイエンスカフェで「やや緊張気味」（本人談）の土井教授

自営のATとして活躍



私の部屋でランチを

枝尾 久美講師

(リハ学科PT専攻)

「学生時代は大いにチャレンジを」

図書館主催「私の部屋でランチを」が5月23日(月)にキャンパステラスとオンライン及びサテライト室で開催され、アスレチックトレーナー(AT)で理学療法士(PT)でもあるリハビリテーション学科理学療法学専攻の枝尾久美講師が「アスレチックトレーナーを生業(なりわい)とする」と題して話しました。オンライン、サテライト室も含め32人が参加。

県内でも数少ない自営のATとして活躍する枝尾講師は、自身の事業内容やATの仕事内容、ATの日米比較、PTがトレーナーとして仕事をする場合の形態と自営業のメリット・デメリットなどをわかりやすく説明しました。自身がATとして生計を立てるようになった経緯についても語り、その基盤になったのは「学生時代の経験」だと明かしました。

また、ATは何よりも信頼を得ることが大事だと説いた上で、チームや選手と真摯に向き合うこと、長期的視野に立ったサポートが大事であると、学生に向けてアドバイス。「学生時代には大いにチャレンジし、様々な出会いやつながりも大事にしてほしい」と訴えました。(安部悠介)



「ATは何よりも信頼を得ることが大事」と説く枝尾講師

新会長に松山さん

学友会総会

学友会の本年度総会が5月19日(木)、50周年記念館であり、役員改選では新会長に松山直央さん(リハビリテーション学科理学療法学専攻3年)が選ばれました。

学友会総会が対面で開かれるのは2年ぶり。山内佑介会長(同4年)は、コロナ禍により活動が制限された日々を振り返りながらも「4月に行われた新入生歓迎会では様々な形で多くの方にかかわっていただき、少しでも学友会として前進したのではないかとあいさつしました。

一方、松山新会長は、「例年より規模は小さくなるかもしれないが」と断りながらも、学園祭の対面での実施を目標に掲げました。(安部悠介)

新任教員 私の研究 6



山本 良平

リハビリテーション学科理学療法学専攻講師

有効な運動学習探る

動作の獲得(運動学習)を促すことは理学療法の重要な役割です。私は運動学習に有効なFeedback方法(運動の結果の与え方)について研究してきました。従来、動作中に与えるFeedbackは運動学習を阻害するとされていましたが、同じ課題を練習する場合でも課題が苦手な人にとっては動作中に与えるFeedbackが運動学習に有効に働くという結果が得られました。今後はこの知見を臨床や教育の現場で活用するための研究に取り組みたいと考えています。

学生の眼

勉強を楽しむ

リハビリテーション学科ST専攻1年 橋口 璃央

大学に入学して約2カ月が経った。大学生活を送るなかでたくさんの驚きを感じている。その一つは、授業時間が長い上に講義のスピードが速いことだ。内容も難しいため、理解するのに苦労する。だから、言われたことだけに取り組む受け身の勉強では授業についていけない。衝撃だった。理解が追い付かない授業プリントを見るたび、不安や焦りが私を襲ってきて毎日が苦しかった。

しかし、苦しむばかりでは始まらない。勉強も楽しめる大学生活を送りたいと思い、生活習慣や勉強法について考え、行



動することから始めてみた。例えば、朝5時半に起きて予習をして、夜眠る前に復習を行うこと。勉強中に眠気が襲ってきたら筋トレをして追い払う。授業で興味を持ったことは調べてノートにまとめる。まだ始めて時間は経っていないが、たったこれだけで授業の理解度が少しずつ変わってきたと感じ、授業も楽しめている気がする。この気持ちはずっと続くように、努力を継続して4年間の大学生活を最高のものにしたい。

(アカデミックスキル支援センター・学生広報スタッフ)